

Report



「故郷スイスの村のぬくもり アンカー展」

平成20年2月2日(土)～3月23日(日)

スイス生まれの画家、アルベール・アンカー(1831～1910)の日本では初めての展覧会。東京・渋谷のBunkamuraザ・ミュージアムから巡回してきた本展には、東京で感動したから郡山にも来ました、というお客様も大勢いらっしゃいました。



「第17回青木繁記念大賞公募展」

平成20年6月7日(土)～6月29日(日)

郡山市と姉妹都市である福岡県久留米市出身の洋画家、青木繁を記念して開催されてきた公募展。平成6年の第3回展から当館で開催されてきた同展は、今回が最後となりました。



ギャラリートーク中の湯浅氏

第2回美術館連絡協議会奨励賞受賞! 郡山市立美術館開館15周年記念 「Yuasa Jojiによる湯浅譲二展」

平成19年11月3日(祝土)～12月16日(日)

郡山市立美術館開館15周年を記念して開催された「Yuasa Jojiによる湯浅譲二展」は、郡山市が世界に誇る作曲家湯浅譲二氏の業績を回顧する展覧会でした。会期中は、湯浅氏による講演会(11月3日)、ギャラリートーク(11月17日)、「ヘルシンキ大学男声合唱団演奏会」(11月6日)、「湯浅譲二室内楽演奏会」(12月14日)、湯浅氏が音楽を担当した映画会などが催されました。



「美がむすぶ絆 ベルリン国立アジア美術館所蔵 日本美術名品展」

平成20年4月12日(土)～5月25日(日)

平安後期から近代までを網羅した、贅を尽くしたかのような展覧会。迫力ある屏風に加え、桃山美術の豪華絢爛な作品も充実していました。



ワークショップ
指導中の矢田氏(右)

ワークショップ
「羊毛を紡ぎ編んでみよう」

日時：平成20年3月8日(土)、16日(日)

講師：矢田十四子氏(Work Shop GRASS HEART代表)

「アンカー展」にあわせて、昔は生活に欠かせなかった毛糸の手紡ぎ、手編みにチャレンジしました。



「芸術は体力だー」がモットーで食べることが生きがいである私は料理をこころが好みます。調理は絵を描く段取りと大層似ています。絵や彫刻を見ることも同じく同じく漫画も好きです。秘かに、漫画家は現代の浮世絵師だと尊敬している。庭の草むしりをしながら花や実を眺めていると無償に描きたくなります。つまりグレイ・ジョーは日常生活の手の届くところにいるもの、それをどう選択するかどう認識するかが重要です。

「ワークショップ」和の色の「カラージュ」
平成20年3月22日(土)、23日(日)
中村亞都子(画家)

料理もそうですがシンプルなお品を生かしてパリエーション豊富なおいしいものを作ることには、一番の楽しさを感じます。

何を描くか、どういう方法で描くかは自由。手と手で使える道具ならどんなものでも可。というかなり乱暴な講座だったので、丁寧に絵具を塗り重ねて色の響きあいを表わす人。砂や紐、布を画面に貼って接着剤は膠(質)の異なる色彩を自由に遊ばせる人。絵を描くというよりその時々インスピレーションを色彩に変換させて瞬時に絵にしてしまおうマッシュアップのような受講生のみならず。その手さばきの鮮やかに思わず拍手!! アマカブロかなど関係なくただものでない隠れアーティストはすぐ隣りの人たちなのでした。いつも生活の中で美しいものにさりげなく気づき、ものを創って楽しむ遊び心を共有できる私たちの毎日はなんて贅沢なのでしょう。そんなことを実感した2日間の講習でした。

生活の中で感じる美しさ、 創るよろこび

ワークショップ「和の色の「カラージュ」」

平成20年3月22日(土)、23日(日)

中村亞都子(画家)

「芸術は体力だー」がモットーで食べることが生きがいである私は料理をこころが好みます。調理は絵を描く段取りと大層似ています。絵や彫刻を見ることも同じく同じく漫画も好きです。秘かに、漫画家は現代の浮世絵師だと尊敬している。庭の草むしりをしながら花や実を眺めていると無償に描きたくなります。つまりグレイ・ジョーは日常生活の手の届くところにいるもの、それをどう選択するかどう認識するかが重要です。

「ワークショップ」和の色の「カラージュ」
平成20年3月22日(土)、23日(日)
中村亞都子(画家)

料理もそうですがシンプルなお品を生かしてパリエーション豊富なおいしいものを作ることには、一番の楽しさを感じます。

何を描くか、どういう方法で描くかは自由。手と手で使える道具ならどんなものでも可。というかなり乱暴な講座だったので、丁寧に絵具を塗り重ねて色の響きあいを表わす人。砂や紐、布を画面に貼って接着剤は膠(質)の異なる色彩を自由に遊ばせる人。絵を描くというよりその時々インスピレーションを色彩に変換させて瞬時に絵にしてしまおうマッシュアップのような受講生のみならず。その手さばきの鮮やかに思わず拍手!! アマカブロかなど関係なくただものでない隠れアーティストはすぐ隣りの人たちなのでした。いつも生活の中で美しいものにさりげなく気づき、ものを創って楽しむ遊び心を共有できる私たちの毎日はなんて贅沢なのでしょう。そんなことを実感した2日間の講習でした。

当館コレクションから

日本を訪れた
クリストファー・ドレッサー



「彩釉細首水差」1879-82年頃 当館蔵

クリストファー・ドレッサー(1834～1904)は、十九世紀後半にイギリスで活躍したデザイナーです。彼は、陶磁器、ガラス、テキスタイル、金属製品など様々な分野のデザインを手がけたことで知られています。そのデザインは、無駄な装飾を省いた幾何学的な構成美によつて、二十世紀における近代デザインの先駆的な活動と位置づけられています。

また、ドレッサーは、明治初期に日本を訪れて大きな影響を受けるなど、日本と深い関わりがある人物でした。ドレッサーは、日本滞在中に明治政府の依頼で調査旅行に出かけており、陶磁器や金工品、漆器や染織品などの工芸品を視察し、製品が海外への輸出に向いているかどうかを判断し、改良のためのアドバイスを与えています。また、正倉院の宝物を調査した最初の外国人であることも注目されるでしょう。

帰国後、ドレッサーは、四月月に及び日本の滞在の記録をもとに、「日本ーその建築、美術、工芸」を出版しました。四百ページに及ぶこの本は、日本の美術工芸品や建築、日本の風俗などについての正確な情報をヨーロッパに紹介する大きな役割を果たしています。

当館には、ドレッサー作品のコレクションがあり、その数は約百点に及びます。日本訪問は、ドレッサー自身の創作活動の転機にもなりましたが、日本の芸術の理解者となつていったドレッサーは、西洋と東洋の両方のエッセンスの融合ともいえる、彼独自のデザインを生みだしていきました。ドレッサーがイギリスに戻ったのちに手がけた金属器や陶磁器には、日本の工芸品の影響が顕著に示されています。たとえば、金属器では幾何学的な構成を用いたシンプルで美しい造形を生みだし、陶磁器ではそれまで用いていた図案による装飾をやめ、釉薬の色だけで加飾を行う方式を取り入れています。

来日前のドレッサーのデザインを足し算とするならば、来日後のそれは、余計な要素を削ぎ落としていく引き算によつて成立したデザインといえるのかもしれません。(佐藤秀彦)



「クラレット・ジャグ」 当館蔵



「銀製ティーセット」1885年 当館蔵

寄贈作品

今年度、加藤富士子様から川端正光油彩画1点、丸橋敏男様から丸橋長二郎油彩画2点、野地友子様から野地正記絵画2点、勝田忠様からハヤカワポケットミニテリブック表紙原画97点、佐藤静司様から絵画29点、亀井よし子様から亀井家伝書資料(素描、木版画等)、山鹿英助様から石版画帖「懐古」東海道五十三駅真景、高橋周子様から三木宗栄木彫をそれぞれ寄贈いただきました。